

子どもの砂遊びに関する一考察

谷 口 綾 花

I. 研究目的

私は、保育園実習で未満児と関わったとき年齢によって遊びの楽しみ方が異なることに興味を持った。特に、砂遊びで1歳児がカップに砂を入れ表面を平らにする事を繰り返す姿に注目した。平らにすることに集中し少しでも表面が崩れたらカップの中身を全て出しゼロから砂を入れる姿を不思議だと思った。

砂場の起源は明治30年ごろだと考えられており、アメリカの影響を受け砂場を設置するようになった。その後、明治40年代になると一気に広がっていったと言われている¹⁾。

しかし、今日では子どもと砂場の関係は必ずしもいい状態のものばかりではない。例えば、犬や猫などの排泄物で砂場が汚れ、親たちが子どもを砂場から遠ざけようとするのが見られるようになった。さらに子どもや園舎が汚れることをきらって砂場での遊びを中止した園も少なからずある。だが、私は実習中子どもにとって砂場は目を輝かせ夢中になって遊ぶことのできる空間だと感じた。

そこで本研究の目的は、砂場での子どもの姿や子どもが砂場で感じる思いを捉え砂場の魅力を詳細に明らかにしていくことである。

II. 研究方法

(1) 対象

広島県内公立A保育園未満児クラスを対象とした。事前に園長先生に調査概要を説明し、論文作成・発表に使用することの許可を頂いた。園名や子どもの名前については匿名とし、A・Bなどの記号で表示する。

(2) 方法

自由遊び時間における砂場遊び場面の観察を行った。観察時には約10名の子どもが砂場で遊んでおり、カップ・型抜き・スコップ等を使い山作りやごっこ遊び等自由に遊んでいた。観察では砂場で遊ぶ子どもたちのありのままの姿を捉えたいと考え、遊びの邪魔にならないよう気を付けると共に、子どもが安心して遊べるような雰囲気を作るよう心掛けた。また、観察中はメモを取り、帰宅後メモをもとに観察記録を作成した。

(3) 期間

期間は平成26年9月30日～平成26年10月8日の内4日間で、観察時間は10時半～11時であった。

III. 結果と考察

(1) 1歳児・2歳児・3歳児の遊び方の違い

観察の結果、1歳児、2歳児、3歳児には図1に示すような遊び方の違いが見られた。

1歳児～3歳児の砂遊びを観察する中で特に砂場で遊び始めたばかりの1歳児の行動に興味を持った。そのため、1歳児に注目した事例を2つ取り上げる。

(2) 事例1

・2014年9月30日 10時半～11時

保育者が1つの大きな砂の山を作っていた。1歳児のCちゃんDちゃんE君はその山をさらに大きくしようと手で砂をかけてい

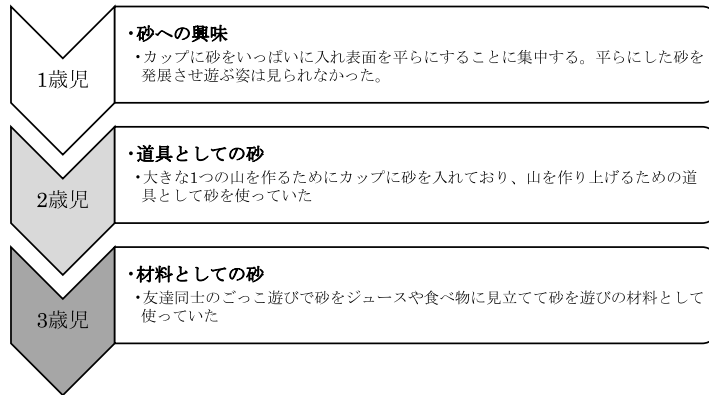


図1. 1歳児・2歳児・3歳児の遊び方の違い

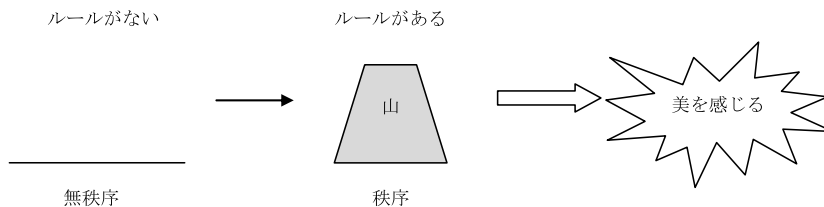


図2. 無秩序から生まれる秩序

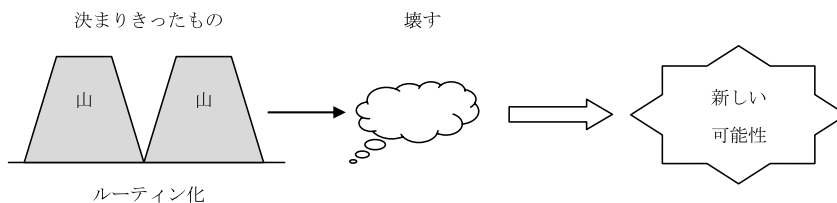


図3. 新しい可能性

た。

Cちゃんは砂をかける時自分たちが作りかけている山の砂を削り、その砂を同じ山にかけていた。これを何度か繰り返していたが、突然その山に登り作っていた山を壊し始めた。Cちゃんの行動を見たDちゃんとE君も同じように山を壊し始めた。

山が無くなり平面になったところからまた3人と保育者で山を作り始め、作っては壊すことを繰り返し楽しんでた。

1歳児が一つの遊びに長い時間集中している事に驚いた。淡々とカップに砂を入れ、その砂を全て出しては入れる行動を繰り返すことに興

味を持った。また、B君が私の所にカップを持ってきたときB君の思いが汲み取れず戸惑った。またB君に限らず周りの1歳児も同じような姿が見られた。

このように、子どもはカップの中の砂を真っ平らにすることや作り上げた物をゼロから作ることを繰り返していた。

①美・新しい可能性

CちゃんDちゃんE君の砂の山を作り壊すことを楽しむ姿から、子どもにとっては「壊している」という思いではなく、「自分が砂に対して働きかけをすることで変化する」という思いで楽しんでいると考えられる。

笠間²⁾によると子どもは無秩序の中から、秩序ができてくことに美を感じるという。つまり図2で示すようにここでは、何もない状態から山を作るといふ、秩序が出来てくことに美を感じていると言える。

また逆に、何度も砂もかけて山を作り壊すという子どもの行為は、ルーティン化した秩序を、壊してもう一度無秩序化することであり、そこから新しい美の可能性が出現するのだと考えられる(図3)。この秩序と無秩序の世界を往復する、ということが子どもには本能的にそなわっており、砂場は秩序と無秩序を簡単に作ったり壊したりできる世界であるため子どもは砂遊びに夢中になるのだと考えられる。

②同じようなこと

山を作っては壊すという同じ行動を繰り返している姿から、子どもは行為(働きかけ)とその行為によって起こってくる結果とを、毎回照らし合わせていると考えられる。子どもは何度も繰り返しながら次はこうなるだろうと予想を立てて実際にやってみることで確かめている。

私たち大人にとっては「同じ」に見えることでも、子どもにとっては毎回毎回の意味が違う「同じようなこと」の繰り返しであると言える。

(3) 事例2

・2014年10月8日 10時半~11時

1人で砂遊びをしているFちゃん。Fちゃんはお皿に砂をのせて「いらっしゃいませ」などと言い、砂でカレーライスを作り、1人でごっこ遊びをしていた。他の友達と遊ぶ様子は見られなかったが、時折保育者のほうを見てまた遊び始めた。

作ったカレーライスを保育者に見せると保育者は「おいしそう」「ごちそうさまでした」と声をかけており、Fちゃんは保育者の反応を楽しんでいた。

また、隣で砂にきんもくせいを乗せて楽しんでいるEちゃんをじっと見てFちゃんも同じようなことをし始め砂遊びを楽しんでいた。

Fちゃんは保育者の姿を確認しながら砂遊びを楽しんでおり、また、一緒に遊ぶことはなくても、Eちゃんを気にかけてEちゃんの遊びを取り入れながら遊ぶ姿が見られた。

①自立・依存

事例2の保育者と子どもの関係は、自立と依存の関係だと考えられる。

砂場で遊ぶ子どもは保育者と一定の距離があるが、そこにはフェンスなどの障害になるものがないという空間的な特徴がある。また、一定の距離がありながらそこには見守ってもらっているという安心感があるようだ。いざとなればすぐに助けを求めることができ、援助の手も差し伸べてもらえるという依存の気持ちも持ちながら、自分は1人でも遊べるぞという自立の思いを持ち、砂場で遊んでいる。

周りの空間との境界が不明瞭というあいまいさが、子どもに対して自立と依存の選択を自由にしており、砂場は子どもにとって保育者からの自立と依存の均衡が微妙に保たれている場だと言える。

②いる・いない

さらに、Fちゃんは「いらっしゃいませ」とひとりごとをつぶやきながら、いろいろな思いが頭の中を駆け巡っており、「うまくいかないな」などと考えていたと思えば、「よーし、できたぞ」「つぎはあれをしよう」というように、自分の世界を作り上げている。そのうちに、子どもたちは隣にいる相手の様子が気になってくる。Fちゃんのようにじっと眺めて同じ遊び方をする子もいれば、友達と一緒に遊び始める子もいる。

砂場という場所は、一人遊びも並行遊びも、そして集団で協力し合う遊びも展開できるという懐の広さも持っている。砂場は仲間がいるようでいない、いないようである、そのいずれにおいても遊びを楽しむことができる場であると言える。

Ⅳ. 総合考察

本来子どもというのは、かちっと決められた関係のなかだけで生きるのではなく、むしろあいまいともいえる関係性（あいまいな時間や空間、縦横多様な子ども集団）のなかで自らが自分の意志で、選択的に生きていくことを欲する存在である³⁾。

事例1、2から私は砂遊びという遊びの空間には様々なあいまい性が混在しており周囲の大人たちもそのような子どもの姿をじっくりと見守ることを許してくれる場所だと考える。

これこそが子どもを安心させ夢中になって遊ぶことのできる砂遊びの魅力なのではないだろ

うか。

参考文献

- 1) 笠間浩幸 (1996) 〈砂場〉歴史 (3) 日本保育学会大会研究論文集, 49.
- 2) 笠間浩幸 (2007) 子どもの未来の姿が、よく見えるのが砂遊び エデュカーレ, 22, pp. 33-39
- 3) 笠間浩幸 (2001) 〈砂場〉と子ども 東洋館出版社

謝辞：児玉理紗先生、ご指導を頂きありがとうございました。